

IV-251 仙台城址における「水利用」の沿革と現状

東北工業大学 正会員○花 淵 健 一
同 同 松 山 正 将
同 同 菊 地 清 文

1. はじめに: 仙台城址は全国から数多くの観光客を集め紛れもなく杜の都仙台のシンボルの一つであるが、これだけの歴史的価値と知名度を有しながら諸般の事情により、いまだに国の史蹟指定を受けるに至っていない。このような足踏み状態が続く間にも、風雨や市街化等によって本丸の石垣や急崖部分をはじめ城址の背後にあって仙台城の水源となっていた「御裏林(おうらばやし)」の地形や自然環境の荒廃が進み、この地域の文化財的価値を徐々に低下させているのが現状である。

本報告は、著者等がこの地域の現況把握と史蹟保護、環境保全の立場で取り組んでいる環境地図作りの中から、仙台城の藩政時代の水利用とかかわって現地踏査で得られた知見について述べるものである。

2. 藩政時代の水利用: 仙台城の水源と水系を模式的に示したものが図-1である。この図のように仙台城の水利用の特徴は、御裏林の三つの沢すなわち深沢・本沢・裏沢の湧水を、段階的な地形を利用して人工的に貯えるように、中嶋池、外堀(五色沼・長沼)を設け、要所、要所に井戸を配置して利用していたことである。本丸の主水源は深沢上流の湧水「御清水(おすず)」を貯留して用いていた。次ページの図-2は、奥津氏の「仙台城周辺の水系・湧水・堀切・切通し位置図」に筆者等が広瀬川部分を加筆したもので、仙台城の水利用を地形的に把握したものである。尚、御裏林地域は、国の天然記念物に指定され現在は東北大学理学部付属植物園として公開され保護されている。

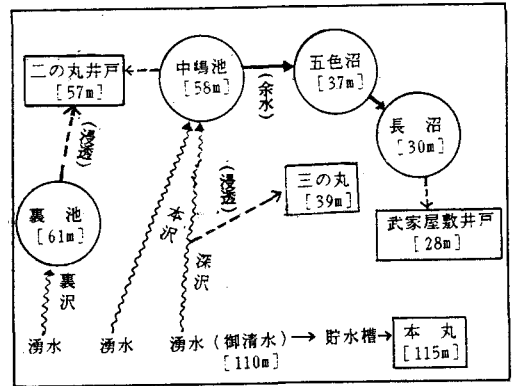


図-1 仙台城の水源と水系の仕組み
〔 〕内は概略標高

3. 踏査及び測量: 現地踏査は縮尺 1:2,500の既存地形図を基に、御裏林、中嶋池跡(戦後米軍キャンプ地造成等のため埋め立て)、五色沼、長沼そして本丸急崖側を、流水経路や侵食状況、斜面崩壊箇所等を測量と共に写真記録し検討資料とした。御清水の湧水量、PH、水温等1990年12月より測定継続中である。

4. 踏査及び測定結果: 図-3は、水源である御裏林を踏査によって作製した水系と斜面崩壊箇所を示したものである。御裏林の流域(450,000㎡)は、大きく二つに分けられる。一つは五色沼、長沼を通り排水路で広瀬川に至る流域(303,000㎡)と、いま一つは裏沢と火薬庫跡の流域で裏池跡を通り扇坂沢から広瀬川に至るものである。特に調整池の役割を果たしていた中嶋池が埋め立てられてきた事によって、御裏林からの流出水は土砂を含み流下するため、両沼への土砂が堆積し、藩政時代の面影とはほど遠い。図中の○印は今回の踏査によって確認した崩壊箇所の位置で、単純に1978年当時の位置▲印と比較は出来ないが、この12年間で崩壊箇所が約5倍、面積で約2倍に拡大し斜面崩壊が進行しているものと思われる。又、本丸東側の急崖線も雨水による侵食で崩落が進み急崖線の後退が見られる。御清水の湧水量は 3.7~ 5.2 /min (1990.12.5~1991.4.4) であり継続測定中である。

5. まとめ: この地域の史蹟保存のために、仙台城の水利用の状態を整えることは大切である。まず、中嶋池を復元し、五色沼、長沼への負担を軽減させることと、御裏林の生態系を壊さずに斜面の保全対策を講ずることが最優先されるべきと思われる。あわせて、御清水に対しても湧水を集水し貯留する流れを構築する必要がある。いづれにしても、史蹟指定に至るまでに、藩政時代の諸々の位置等の検討を含め、詳細な現状地形図の作製は継続しなければならないであろう。

6. おわりに: 踏査測定にご協力戴きました東北大学附属植物園関係者諸氏及び本学卒業研修生に謝意を表する

参考文献

- 1) 奥津春生: 1965仙台城の地形・地質—とくに兵用地誌・石垣・刻印・湧水を中心にして、仙台城. p123-165
- 2) 中川久夫: 1990仙台城址及びその周辺地域の地質—仙台城の水利用、仙台城址の自然. p27-32

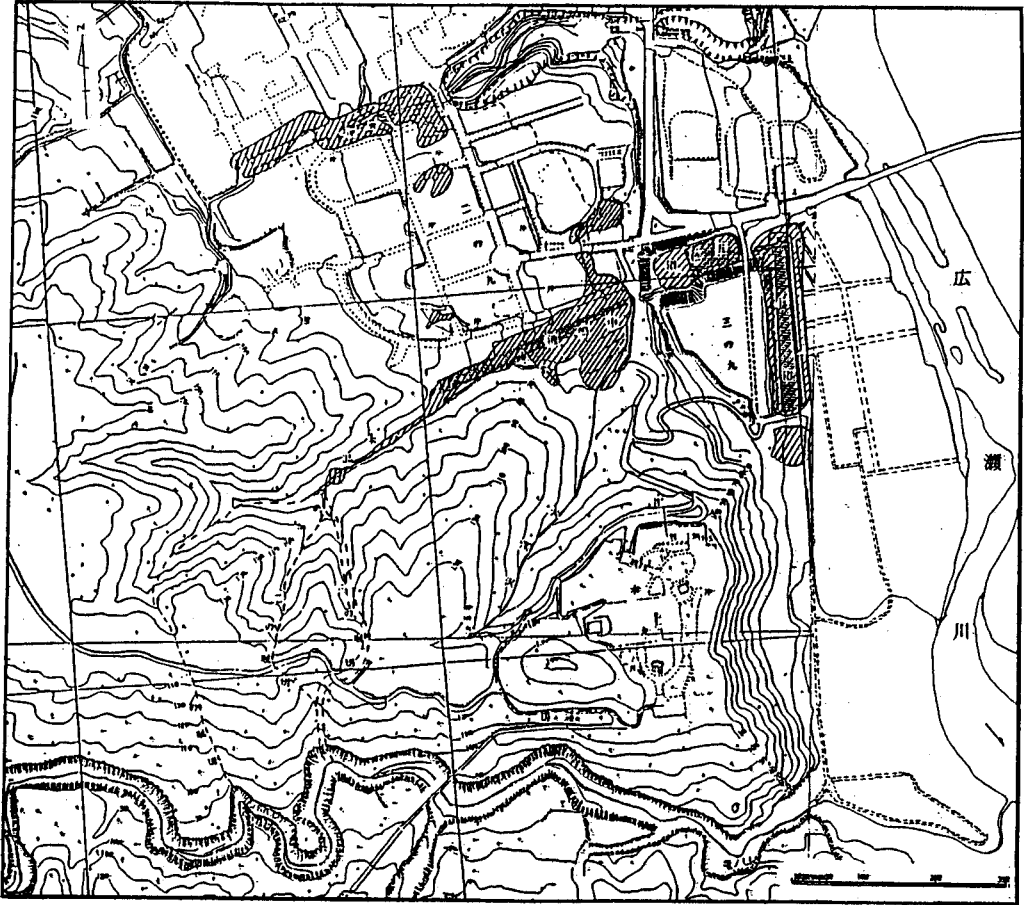


図-2 仙台城周辺の水系・湧水（御清水・三の丸湧水）・堀切・切通し位置図

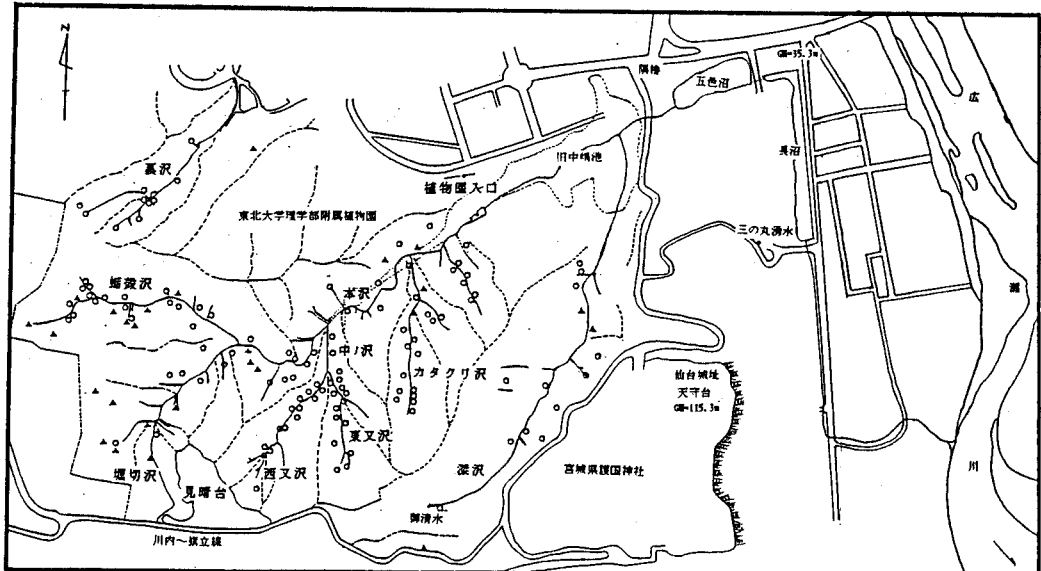


図-3 仙台北址水系現況及び崩壊箇所位置図